

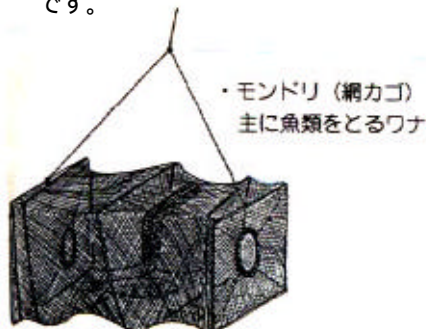


河川にて投網をうつ。倒木が沈んでいたり、狭い場所では活躍できない。

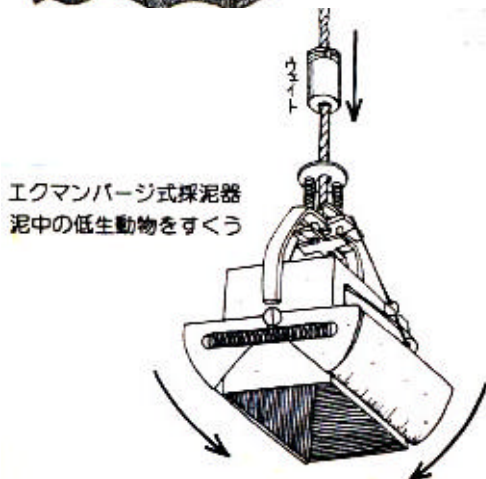
水生動物調査法

まず捕獲する

水生動物の調査は、大別すると魚類調査と底生動物(水生昆虫等の魚類以外の水生動物)調査に分けられます。これらの調査は、まず捕獲することが大前提なので、他の調査と比べるとかなりたくさんさであみの道具(たも網、投網、刺網、叉手網、モンドリ、採泥器、チリトリ型金網、etc. ...)を使用します。これらの中でも、たも網、投網は水生動物調査では最も多用される道具です。しかしながらその性格は正反対で、投網は派手に魚を捕る花形スター的道具であり、たも網は地味に小魚や底生動物を捕る脇役といった感じです。



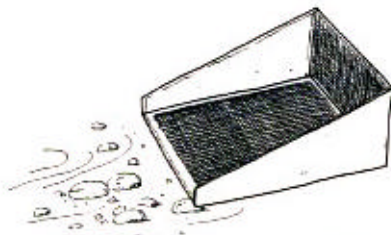
・モンドリ(網カゴ)
主に魚類をとるワナ



エクマンバーグ式採泥器
泥中の低生動物をすくう

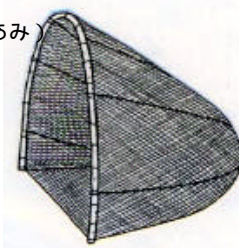
たも網 1 本で現地調査へ

確かに投網は、練習次第で大量に魚が捕れて非常におもしろい道具なのですが、投網を打てるスペースがないと活躍できない、底生動物は捕れてもアメリカザリガニどまり、魚の隠れ家になるような倒木が底に沈んでいると、網がひっかかってしまうため、逆に網を打つことができない、などのデメリットもあります。この投網のデメリットをカバーするのがたも網なのですが、使い方次第で魚も結構捕れてしまうので、私達はこのたも網を調査で最も多用しています。このたも網の扱い方を極めれば、“たも網 1 本で現地調査へ”何てことも夢ではないかもしれません。というわけで、このたも網についてちょっと述べてみましょう。



チリトリ型金網
水生昆虫のコドロード用底生動物の定量採集用

・叉手網(さであみ)
主に魚類用
底生動物採集用



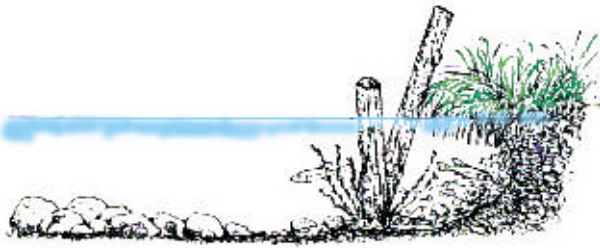
・たも網
水生動物調査でもっともよく使われる道具。

たも網は最も使用頻度が高く酷使されるため、その耐久性が問われる道具なので、私達は網の枠や柄が頑丈な、日本の淡水魚研究の第一人者である君塚先生が考案した君塚式のたも網を使用しています。小川などの小規模な水環境の調査であれば、たも網が 1 本あれば魚類、底生動物の調査が全てまかなえてしまいます。基本的な使い方としては、獲物が潜んでいそうな場所の脇に網をセットし、底に堆積した土砂ごと網の中へ“思いきり蹴り込んで”やります(図 1)。



図 1 : たも網の中に土砂ごと蹴り込む

基本的にはこれで OK なのですが、それなりの成果を出したいと思うならば、水生動物がどういった場所にいるか、どのように近づけば逃げないかなど、それなりの知識も必要になります。



水生動物のいる場所。図の左側が流心部になる。水中からのびる杭などの周りにも集まる。



たも網による水生生物の採集。網の中に入った生き物を取りわけると。

隠れる場所を捜せ

じゃあどうすればいいんだ！という人のために、“最低限これだけ知っておけば何とかなる”ということをお教えしましょう（よく考えれば、あたり前のことばかりなのですが）

水生動物（ここでは特に底生動物）はどういった場所にいるのか？

簡単に言えば、彼らの隠れ家となる場所を捜せば良いのです。具体的には、河川では流れの速い流心部では底の礫の隙間とか、流れの緩やかな場所では底泥中や、藻場、陸上植物が水中へ垂れ込んだ水際部、などがあげられます。

アプローチの方法は？

獲物が魚の場合は、相手に自分の存在がバレないようにそーっと近づ

く。河川であれば、下流側から近づくのが鉄則。底生動物の場合は、あまり気にする必要はありません。

とりあえずこれだけ知っておけば、たも網でカバーできる調査は何とかなるのですが、調査の回数を重ね、経験から得られた知識をフル稼働させることによって、また更に成果が上がっていくことは言うまでもありません。

（本社自然環境調査室・佐々木孝太郎）



（原案 福田宏 / イラスト 飯塚要）

ありません おしまい。